



羅針盤

主幹 荒木 光弥

ASEANで暮らす日本人 永住願望の多いフィリピン

タイから始まった企業進出

今回は東南アジア諸国連合（ASEAN）で暮らす日本人を追跡し、その暮らしぶりを追ってみました。

筆者の大学後輩は、卒業間もなくフィリピンの首都マニラにある国際機関で働き始め、親子二代にわたってマニラに定着、その子どもたちは米国、オーストラリアに留学し、それぞれの生活を始めている。これはまさに日本人の国際化を絵に描いたようなケースだとも言える。こうした日本人の海外

ドラマは、今やアジアのみならず、世界中で演じられているに違いない。

ここでは、まずはASEANで暮らす日本人に焦点を絞って、その実像を追ってみることにした。ここに提示した一覧表のように、そこには日本人の一つの行動パターンが見えてくる。

日本人の東南アジアにおける滞在人数規模は、日本企業の海外進出の歴史が物語っているように、タイが群を抜いた存在である。日本企業の海外展開の歴史のよると、その第一歩がタイの首都バンコク

当時を思い出すと、バンコクは、日本企業の海外展開の第一歩の地であり、1960年代のタイの学生運動の標的になるなど、初めは日本からの進出企業にとって多くの試練を経験したものである。しかし、それが日本企業の海外展開にとって良き教訓になったと言われている。筆者は、東海大学が支援したモンクット王工科大学を取材するために、バンコクを訪ねることが多かったが、1960年代末には学生による反日運動や反政府運動に遭遇するなど、多くを経験した。今、回想するに、伝統的なタイ社会が外国の資本主義という新たな価値観に触れて激動したのであろう。

日本人の永住願望

しかし、外国企業は資本主義をタイ社会に根付かせることになった。タイの伝統社会にとって、天から変な神様が舞い降りたような気分になっていたに違いない。

良いか悪いが、タイの首都バンコクは日本企業をはじめとする外

から始まるケースが圧倒的に多い。筆者の海外取材活動もタイのバンコクから始まっている。1960年代末のタイの国際空港は唯一ドンムアン国際空港で、ポロタクシーで田んぼ道を一路バンコクに向かって走ったものである。その沿道にポツリポツリと日本からの進出企業の工場が散見できた。

ASEANで暮らす日本人(2023年現在)			
国名	滞在人数規模(人)	長期滞在(人)	永住願望(人)
タイ	82,574	80,695	1,879
シンガポール	36,200	32,768	3,432
インドネシア	16,539	15,343	1,196
マレーシア	27,256	27,254	2,044
フィリピン	15,758	9,737	5,955
ベトナム	22,185	22,185	321
ブルネイ	165	161	4
ミャンマー	2,849	2,834	15
カンボジア	4,502	4,315	187
ラオス	789	747	42

2023年データブック・オブ・ザ・ワールドの情報を基に本誌作成